
『月夜恋詠』続きは？

金魚草

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

『月夜恋詠』 続きは？

【コード】

N0505U

【作者名】

金魚草

【あらすじ】

今どの国でも、庶民の間や貴族の間でも流行っている『月夜恋詠』という書物があった。噂によるとその書物は実際の話をも文字にしたものらしい。みんながその書物に夢中になっている中少しもその書物に興味を示さない少女 燭名鈴 がいた。しかしそれには誰も知らない理由があったのだった。

皆が羨むすべてを捨てた2人

満月の夜、どこよりも強大で豊富な資源をもつ青梁国の王宮から抜け出す2人の男女の姿があった。

男が言った。

「国境まで急ごう。砦杯国に入ってしまったえばいくら青梁国の王とて見つけたすことはできまい。」

女が応えた。

「そうね。絶対にお腹の子と3人で幸せになりましょう。」

男が微笑んだ。

「どっちかな。男の子と女の子。」

女が微笑み返す。

「実はもう名前は決めてあるの。」

恥ずかしそうに女が言った。

「なんて名前なんだい。」男が幸せそうに聞いた。

「女の子だったら名鈴。男の子だったら黎浩。」

男が困ったように言う。

「どっちもいい名前です捨てがたいな。」

女が悪戯ぼく言う。

「大丈夫よ。男の子と女の子2人産めばいいのよ。」男は嬉しそうだ。

「2人なんて言わず何人でも産んでくれ。私の子を。」

月に照らされた2人の顔はすつごく甘く、とても幸せそうな表情だった。

翌朝、青梁国の王宮では王女 青陽春 と世界でも名の知れた名門貴族の煬家の次期当主 煬秦翔 が消え、大騒ぎとなった。

噂の書物

青梁国の王女と名門貴族の次期当主が消えて、16年がたった。ここ砦杯国では貴族や庶民の間である書物が流行っていた。

「ねえ、もう全部読み終わった？早く私にも読ませてよ！」

お店で働く女の子達が騒いでいるのを見て、場名鈴は少し呆れたように言う。

「それそんなに面白い？」一人の女の子が答える。「こんなに心がキュンとする書物は他にはないよ！！」

「とういか、名鈴これ読んだことあるの？読んでたところ見たことないよ。」

別の子が不思議そうに聞く。

「読まなくても知ってるわ。身分の高い男女が駆け落ちする話ですよ。」

「そうなの！しかもこの書物実話らしいのよ。素敵よね」

「でもそれ噂でしょ。」

「そんなことないわ！」

2人の女の子が言い争いを始める。

そんな中で名鈴が苦笑しながら静かな声で言う。

「実話よ。」

「ほらー」

「なんでわかるの？」

「さあ、なんででしょう？」

悪戯ばく笑いながら、名鈴は仕事に戻った。

だが、心の中で言う。

(だってそれはお父さんとお母さん2人の話だから。)
これは誰も知らない秘密。ばれたらあつという間に噂が広まって大変なことになるだろう。きっと王宮かどこかに連れていかれる。
だから、全く興味のないふりをして過ごす。名鈴は自分が16年間生まれ育ったこの下町が大好きだった。ここでずっと暮らす為にも名鈴は秘密を隠し通すのだった。

岩杯国の王（前書き）

本当に拙い作品で申し訳ないです。
王の登場です。

砦杯国の王

「月夜恋詠？なんだそれは？」

山盛りの書類の間から顔を出し、そう側近に返すのはここ砦杯国の王（秦黎明）であった。

砦杯国は、つい数年前迄は前王によって弱体化していた。前王は、権力をかざし、女と酒に溺れ、ずる賢い家臣たちに踊らされ、政権は滅茶苦茶だった。その上、民に重税を課し、戦には一度も勝ったことのない最悪な王だった。しかし、長い間誰もそれを変えようとはしなかった。理由は至極簡単で、庶民は力がなく、貴族は愚鈍な王から甘い汁を吸いたいがためであった。

そんな中、国を変えようとする少数派と共に立ち上がったのが現王 秦黎明 であった。黎明は若く、武芸に優れ、統治者としての才に恵まれていた。

おまけに眉目秀麗で、貴族の女性に大変人気だった。しかし、性格は冷酷非情で自身に害をなす者を決して許さず、視線ひとつで周りを屈服させる恐ろしい王であった。即位後の幾つもの反乱をすぐさま鎮圧し、完全に腐りきった政権を立て直し、家臣にも、他国にも恐れられる完璧な王として現在も国を治めている。

黎明が即位してから砦杯国は平和に何事もなく過ごしてきたが、今

年は前年と比べて明らかに忙しくなっていた。それは、春に行われる宴のせいである。本来なら毎年必ず行われるはずなのだが、政権の立て直して忙しく、そんな暇がなかったのだ。だが、今年になってようやくゆとりができ、行われることになった。

この宴は、政治をするにあたってみんなが打ち解けられるようにという主旨でひらかれているが、必ずすることがあり、それは、必ず芝居のもの達を王宮に呼び、芝居を披露させるということなのだが、

「どの貴族の家も今年の芝居はその『月夜恋詠』という話がいいと言いつ張ってまして。」

側近の報告に黎明は目を細めると、

「確か、もうすでに今年の芝居の内容は決まってなかったか？」

と確認する。

「確かにそうなんですが、名門貴族までそれがいいと言っています…」

困りきった顔の側近に黎明はため息をし、

「わかった。それでもいい。しかしそんなに有名な話なのか？」

すると、側近は目を丸くし、

「知らないのですか？今すごく人気の書物ですよ。しかし、芝居となると分かりませんが。一応今度下町で試してみるそうです。」

と、少し難しい顔をした。

「そういえば、今度下町の視察の予定がなかったか？」

「はあ。ありますけど。」

「では、下町の視察のついでにその芝居を見てから、宴の芝居について考えよう。お前が言ったように芝居になるとつまらなかったなんてことになるとう々の宴が台無しだ。一年の最初を飾る宴だしな。」

「分かりました。そうしましょう。」

そう言って側近は部屋から出ていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0505u/>

『月夜恋詠』続きは？

2011年8月6日14時50分発行